

秋の彼岸になりました。この時季<sup>じき</sup>には多くの皆さまがお墓まいりをいたします。それに合わせたように、道端<sup>あぜみち</sup>や畦道、墓地などに彼岸花が多く咲きだします。

彼岸花は、別名を「曼珠沙華<sup>まんじゅしゃげ</sup>」といい、お経にもその名前がでてきます。他にもお彼岸のお墓に咲くことから「死人花<sup>しにんばな</sup>」とか、毒があることから「痺れ花<sup>しびばな</sup>」など、いくつもの名前で呼ばれています。

この花は一般の花とは違った育ち方をします。秋彼岸の時季に、枝も葉もなく莖のみで花を咲かせます。そして、花が枯れると晩秋に葉を出して春までの間に球根に栄養<sup>た</sup>を溜めて、春には枯れてしまい、秋の彼岸の前まで地表には何も無くなります。花と葉が同時に出ることはないという珍しいものです。

晩秋から厳しい冬の間、葉は花が咲くための準備を行い、花に会うこと無く春に枯れてしまう。しかし、その葉によって球根に溜められた栄養のおかげで、秋の彼岸には花が咲くのです。

考えてみますと、この彼岸花の葉のように、私たちのご先祖もまた、未だ見ぬ次の世代<sup>いま</sup>に自らの願いを込め、必死に生きてきたのではないかと思いませんか？

また、日本に存在する彼岸花は、基本的に種で増えることができません。日本全国にこの花が広まったのは、種で運ばれたのではなく、人の手で球根<sup>かぶわ</sup>を株分けして増えていったと考えられています。水田の畦に植えて、その毒でネズミやモグラなどが寄るのを防いだり、墓地に植えて、ご遺体が荒らされるのを防ぐ目的で植えられたものと考えられます。先人たちが様々な苦労の中から学び、植えられたものなのです。

私たちは、親がいなければ存在しません。そして親もその親がいなければ存在しません。親を含めたご先祖は私たちの源です。そしてご先祖は知らず知らずのうちに、次の世代、その先の世代にさまざまなものを残してくれています。

秋の彼岸の季節、お墓まいりの際には、このように先祖から続くいのちに思いを馳せ、生かされている自分の存在を感じていただきたいと思います。